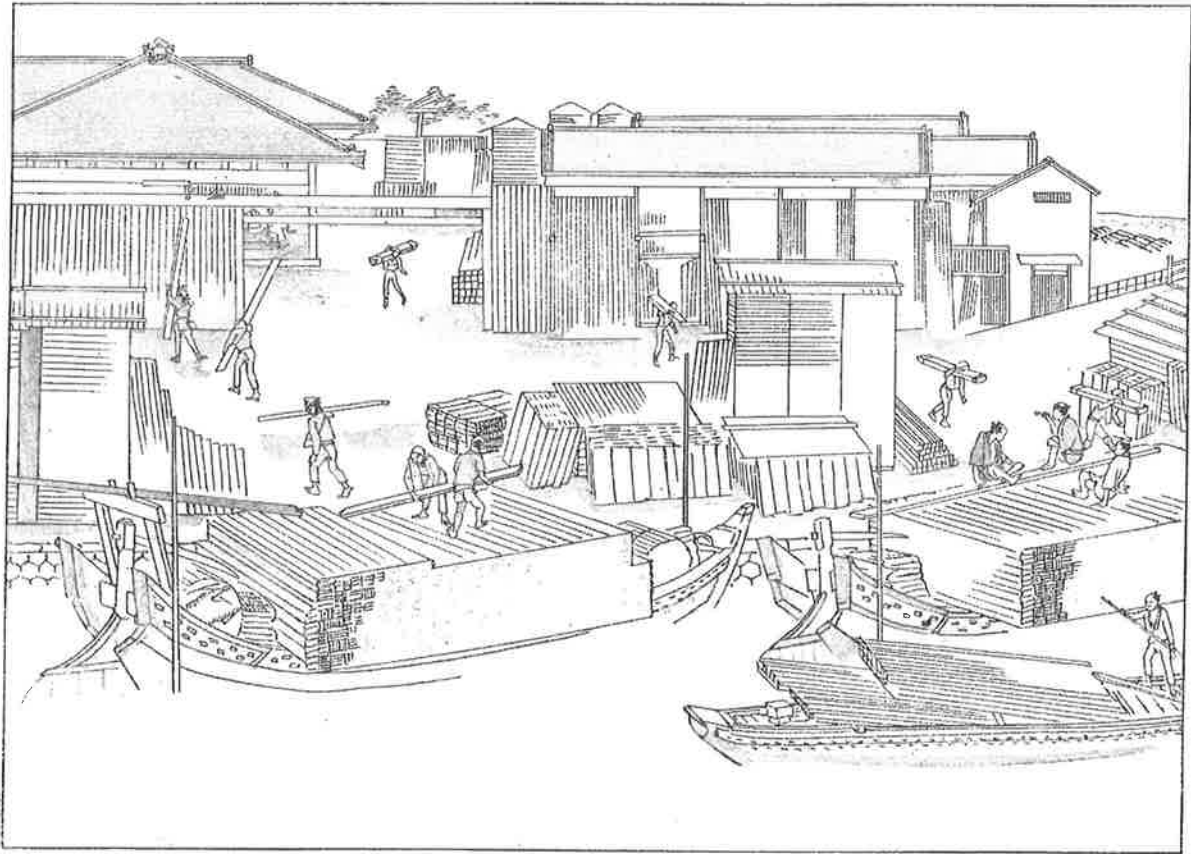


深川木場の歴史と文化 ③

木場の問屋商人

江東区深川江戸資料館



材木の積みおろし『木場名所図絵』より

木場特集の第3回目です。今号は江戸時代の材木商についてのお話です。

江戸の材木商人

江戸の材木商人は、天正18年(1590)徳川家康の江戸入府以降、急激に増加しました。とりわけ慶長9年(1604)には江戸城本丸が築城され、その時に、徳川氏の旧領、駿河・遠江・三河・尾張・伊勢などから材木商が呼び寄せられました。

徳川家康から2代将軍秀忠・3代家光の時代、江戸は江戸城以外にも幕府の施設、各大名・旗本の屋敷、寺社の造営などにより建設ラッシュに沸いていました。材木はいくらでも必要であり、全国から新興都市江戸へ向けて仕事を求めてたくさんの人がやってきました。

こうした中で大和国(奈良県)北山川流域の御用材の伐り出し、運搬に携わって江戸に出入りするようになった大和国吉野と紀伊国(和歌山県)新宮材の材木商が台頭しました。これらの商人は日本を代表する木材の産地を背景にしており、当時としては豪商として江戸材木市場に主要な位置を占めるようになりました。

時代が下り寛文・延宝期(1661～81)には、材木業も細分化し問屋商人と仲買商人に分化するようになりました。問屋商人は産地で材木の値段を決める「山方直仕切り」により産地から直接購入し、これを仲買商人に売ります。これにより仲買は大名や寺社などの御用を勤めていました。この分業体制の確立は、材木業界をより大規模で合理的な市場へと成長させることになりました。江戸中期の享保年間(1716～36)には幕府が問屋の分業化を進め、仲買がじかに山で材木を買ったり、産地からの輸送の途中で材木を買う「出買い」を禁止し、問屋を保護して従来からの流通過程を維持することに目が向けられていました。

木場材木問屋

江戸後期の江戸の材木問屋は、大別すると木場材木問屋・板材木問屋・熊野問屋・川辺問屋に分けられます。木場材木問屋は江戸の中心地、日本橋・神田辺で営業していた問屋で(第51号参照)、やがて寛永18年(1641)の江戸大火を契機に、隅田川沿岸の深川の地に置かれた木場を使用することになったので、木

場材木問屋と呼ばれるようになりました。元禄 14 年 (1701) には、15 名の問屋商人に元木場東方の開拓間もない木場町が払い下げられて、営業が開始され、開設間もない深川木場の中心的存在となりました。加盟する問屋の軒数には異動がありますが、江戸中期の延享元年 (1744) には 11 軒で、うち深川に店舗を持っている問屋商人は、このうちの 5 軒であり、材木置場は深川にあるものの、店舗は日本橋西河岸 (中央区八重洲 1・日本橋 1)・鉄砲洲 (中央区湊)・八町堀 (中央区八丁堀) といった江戸の中心にある店が主流でした。元禄の豪商として有名な紀伊国屋文左衛門は本八町堀に店があり、奈良屋茂左衛門も箱崎町で営業していました。下の表は幕末の木場材木問屋の所在地を町別にまとめたものです。全 18 軒中 16 軒が深川に本拠を置いています。幕末までに名実共に深川が材木取引の中心地になったことがわかります。

幕末の深川木場材木問屋

町名	軒数
深川木場町 (木場 2~5)	3
深川東平野町 (平野 2)	2
深川島田町 (木場 2)	2
深川冬木町 (冬木)	2
深川吉永町 (平野 3~4)	1
深川山本町 (門前仲町 2)	1
深川茂森町 (木場 4)	1
深川宮川町 (富岡 2)	1
深川永代寺門前町 (富岡 1)	1
深川入船町 (富岡 2・木場 2)	1
深川東町 (猿江 1)	1
本八町堀 5 丁目 (中央区八丁堀 4)	1
亀島町 (中央区日本橋茅場町 2~3)	1
合計	18

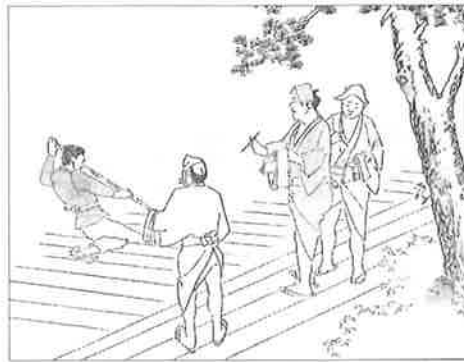
『諸問屋名前帳』より作成
町名の () 内は現在の町名

板材木・熊野・川辺問屋

次に板材木問屋は、江戸築城のために諸国から江戸に集まってきた問屋商人で、現在の中央通り東方の日本橋本材木町周辺に居住していましたが、築城工事終了後は市中各地に分散し、やがて深川木場に集まってきました。

熊野問屋は、山方・産地 (熊野・新宮など) の商人が江戸に置いた出店の場合が多く、産地との関係から「熊野」問屋と名乗っていました。

川辺問屋は 1 番組から 54 番組 (途中欠番あり) までの組に編成されており、その発祥は慶長 9 年 (1604)



角材入札のための下見『木場名所図絵』より

からの江戸城建設工事に際して、関東産の材木を扱っていた材木商が、城の建設に協力したのを契機に、江戸城下での販売を許されたことに始まっています。

その主力は川辺一番組古問屋で、もとは八代洲河岸 (現中央区八重洲) に集中して営業していたといいますが、次第に小網町 (中央区)・浅草・本所堅川 (墨田区) 辺りに移動し、木場材木問屋をも圧迫するほどの勢いになり、深川での取引も始められるようになりました。川辺一番組古問屋の場合、明和 7 年 (1770) には加盟する 77 軒の問屋中、深川居住者はわずかに 2 軒でしたが、安永 10 年 (1781) には 85 軒中 8 軒となり、嘉永 4 年 (1851) の株仲間再興令の時点では、111 軒中 36 軒を数えるまでになり、深川での勢力伸張をうかがわせます。

仲買商人

材木の仲買商人は、日本橋・神田周辺の仲買商によって編成された五カ所組合 (本材木町・新材木町・茅場町・三十間堀町・神田佐久間町)、日本橋・神田・本郷・浅草方面の仲買商が所属する七カ所組合 (芝口町・浜町・本郷竹町・新材木町・神田佐久間町・浅草新堀町・浅草材木町)、浅草・本所・深川を主とする九カ所組合 (深川元木場元番所・本所二ツ目・薬研堀・本郷竹町・浅草新堀町・本所一ツ目・本所三ツ目・聖堂下・浅草材木町) の 3 組合に分けられていました。完全な地域割りとはなっていませんが、深川地域の仲買商人は、九カ所組合に属していました。仲買は材木問屋から材木を仕入れて小売に販売していましたが、次第に問屋の営業を脅かすような商人も現われました。

深川への集積

このように江戸の材木業界は層の厚い流通組織を形成していました。深川に本拠を持つ (居住する) 材木問屋・仲買商が増加するのは、文化・文政頃 (1804~30) からと見られます。こうした流通機構が明治以後も継続し、日本を代表する業界となりました。

参考文献

『江東区史 上』 (江東区 1997 年)

『江東区の民俗 深川編』 (江東区教育委員会 2002 年)

『諸問屋名前帳』 (国立国会図書館 1964 年)